令和６年（2024年）６月５日

れきみん

資料館だより

No. Ⅲ－４６

相生市立歴史民俗資料館

TEL（FAX）：0791-23-2961　E-mail：aioi-rekishi-minzoku@vesta.ocn.ne.jp

〈資料紹介２８〉「江州國友住藤次郎重當作」銘の火縄銃

以前寄贈を受けていた火縄銃を展示するにあたって、調査しました。

火縄銃は大きく筒（銃身）、台木（銃床）、弾丸を撃つための仕組みである「からくり」によって構成される銃です。この銃は全長 118.2 ㎝、銃口径 1.4 ㎝、国友系に多い八角形でストレートな銃身の小筒で、寄贈されたときには前目当、「からくり」の大部分、銃身に火薬と弾を詰める際に使うかるかが失われていました。

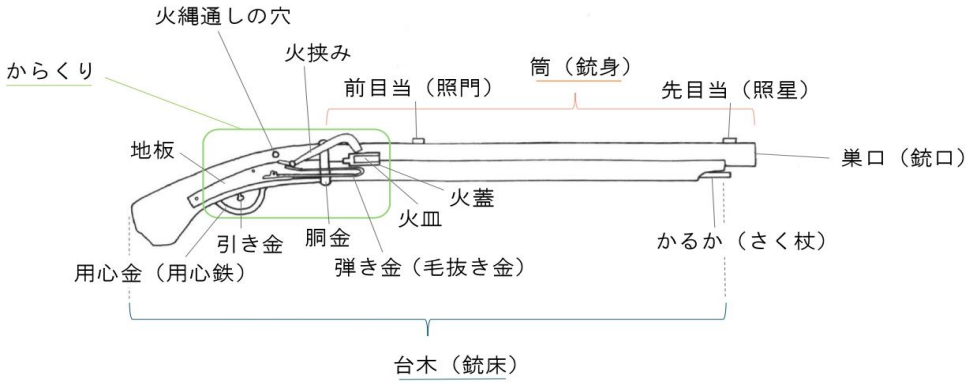

図 1　火縄銃模式図（（所2006）などを参考に岩見作成）

銃身には「江州國友住藤次郎重當作」と銘が刻まれており、近江（滋賀県）の国友村に住む藤次郎という職人により製作された銃であることがわかります。国友は和歌山県の根来、大阪府の堺と並ぶ鉄砲産地です。生産が始まった時期は定かではありませんが、『国友鉄砲記』には、種子島に鉄砲が伝来したとされる天文 12 年（1543）の翌年、当時の将軍足利義晴の命で種子島において複製された銃をもとに国友村での鉄砲製作が始まったと伝えられています。琵琶湖の北にはいくつかの製鉄遺跡や「タタラ」「金糞岳」「鍛冶屋」のような鉄に関する地名が残っており（市立長浜城歴史博物館 1991）、古代から製鉄や鍛冶が盛んであったことがわかります。このような地盤をもとに優れた技術を持った職人が織田信長や徳川家康など多くの大名から注文を受け、多数の鉄砲を製作

しました。江戸時代初頭には幕府お抱えとなり、最盛期には国友村で 73 軒の鍛冶屋と 500 人を超える職人が活躍したようです（市立長浜城歴史博物館 1991）。ただ、藤太郎、藤一郎、藤二郎、藤五郎のような名前は銘や当時の書状・文献に登場しますが、資料館だより執筆時点で「藤次郎」は確認できていません。名前は代々引き継がれますが、一代のみの鍛冶師もあったようなので記録に残っていないのかもしれません。

では最後に銘文の「重當（じゅうとう）」とは何なのでしょうか。これについては三つの説が確認できました。一つは『国友鉄砲記』によるものです。織田信長の命で造った大筒を献上したところ、信長が大いに感嘆して正親町（おおぎまち）天皇に奏上し、藤の御紋と「重當」の二字を給わったという記述です。二つめは中国人の長子孔という人物が登場するもので、将軍足利義輝に国友で製作した火縄銃をほめられて重ね当るという意味の「重當」を賜った（湯次 1996）という話です。『由緒書』によるものと思われます。もう一つも長子孔が登場し、将軍が足利義晴です。いずれも裏付けがはっきりしないので鵜呑みにはできませんが、権力者から賜り国友一族が用いていたものであるとみられます。

この火縄銃は当館 2 階で展示します。また、三濃山で採集された 4 匁（もんめ）の弾丸も合わせて展示しますので、ご覧ください。

図２　「江州國友住藤次郎重當作」 銘火縄銃（岩見撮影）

〈参考文献・史料〉

有馬成甫 1932『一貫斎国友藤兵衛伝』（武蔵野書院）

宇田川武久 2007『鉄砲伝来の日本史　火縄銃からライフル銃まで』（国立歴史民俗博物館）

市立長浜城歴史博物館 1991『国友鉄砲鍛冶－その世界－改訂版』（市立長浜城歴史博物館）

所荘吉 2006『【新版】図解古銃事典』（雄山閣）

湯次行孝 1996『国友鉄砲の歴史』別冊淡海文庫５（サンライズ出版）

刀剣ワールド（https://www.touken-world.jp/tips/47464/）

大嶋吉兵衛・富永徳左衛門・中村兵四郎・脇坂助太夫 1633「国友鉄砲記」『一貫斎国友藤兵衛伝』（武蔵野書院）

著者不明 1818『由緒書』

（岩見美佳）